

たべつむぎ^{だよ}便り・創刊号

2011年1月

「たべつむぎ」です

厳しくも、清々しい寒さを感じさせる日々、お変わりなくお過ごしでしょうか。「たべつむぎ」こと、まつぐちしんやです。この度はじめて、この「たべつむぎ便り」を書いてみました。創刊号です。拙文ではありますが、どうぞお付き合ってくださいませ。

.....

「おいおいそれで、そのたべつむぎとやらは、いったい何をしているのだ、ボサツとした得体の知れぬ男だな。」「うむ、うわさに聞くとどうも、どこかのボロ家に住みついて、畑をコンソコと耕しているらしい。ニワトリも飼っているらしいぞ。たまにそのニワトリを、包丁でさばいては食べているようだ、なんてひどい奴だ。最近では、育てた大根を引っこ抜いて、軒にぶら下げている。たくわんでも作りたいのだろうか...」

初冬のある日、

我がボロ家の室内

温度が、冷蔵庫内より

寒かったので、きょうコンセント

抜きました。冷蔵庫さん

初回までお休みなさい。



はい。とりあえず全部その通りです。

付け加えると、毎週水曜夕方に自宅です。坐る食べるの会というのを続けています。しばらく静かに坐ったあと、玄米、味噌汁、漬物程度の質素な食事をします。随分ゆるいやり方で、しかも、誰も来ないときがほとんどです。が会なのか?、一昨年の5月以来、毎週欠かさず、坐って、食べています。

また、今年春に小さな農産加工所を始めるべく、現在少しずつ準備中です。

たべつむぎは、自分の食生活にできる限り責任をもつことを第一の理念として、小さく、身軽に活動しています。これまで食を通して、多くの方々に出会い、多くのことを学ばせて頂いています。心より感謝申し上げます。どれをとっても未熟ではありますが、今後、どうかよろしくお願いいたします。

いのちと食をめぐる会を 不定期で開いています

私たちの身近な「食」や「命」について、もう一度ゆくり見つけ直していかう機会がほしい。

というところで、アヒンサー(※1)の仲間と「いのちと食をめぐる」会を小さく発足いたしました。

いのちと食をテーマに、幅広く講座を定期的に企画していきます。興味のある方、講座を見つけたら、ぜひ足をお運び下さい。

.....

昨年十一月二七日に開催しました「第4回いのちと食をめぐる会」

食について語り合う茶話会の報告です。約20名の参加者の皆さんとともに素晴らしい時間を過ごすことができました。

DVD『未来の食卓』を観た後、皆で意見や感想を共有しました。ほんの一部を紹介いたします。

・食や農についてすぐには整理できないほどに考えるべきことを多く得た。

・私自身以前、農薬散布で苦しんだ経験がある。(映画の中のように)生産者が一番危険な思いをしなればならない。(農家男性)

・できるだけ近く(地元、知り合いのもの)を買うことで、少しでも農家を応援していかなければならない。

・現在の日本の給食のあり方も、もっと考えていくべきときだ。

・普段口にするものに、思いもしない

添加物がいっぱい入っているということ、これはいけないと思った。

・私は自然農をやっているが、本当に楽しいし、手間が特段かかるわけでもない。慣行に縛られない農業を広めたい。

その後、皆で会食。西海OさんとFさんなど、参加された農家の収穫盛りだくさん、手づくりのパンやデザート、そして参加者同士の会話。

これっていいなあと思った。感じるのは、各生産者、消費者、食育関係者が同じテーブルを囲んでゆつくりと、お話し食事ができたことです。

こうして、それぞれに食に対する思いを共有していくことが(他のどんなことより)、いかに大切か。

.....

『未来の食卓』を佐世保でも上映しよう

今回は試写という形で『未来の食卓』を観ましたが、より多くの方々が「食や農」について対話できるきっかけを作るため、佐世保の映画館(もしくは公共施設)での上映も実現したいと考えています。今年夏ごろを予定しています。

これから動き始めますが、多くの方々の賛同、応援、ご協力をお願いします。(私も!という方、ご一報下さいませ)

.....

次回の、いのちと食をめぐる会の日程・内容は現在企画中です。たべつむぎホームページで確認してください。



たべつむぎのこれから

・2月11日(金・祝)

いのちを頂くワ-ワショップ
~ニワトリをさばって食べる~
9:00~14:00(要予約)
子ども~大人対象

・毎週水よう18:30~

坐る食べるの会

(参加300円 材料は自家米3合)

・いのちと食をめぐる会

現在企画中。詳しくはHPにて。

<<http://tabetsumugi.net>>

自給率 0.1%をめざす ～食育祭 in させばに寄せて～

最近、TPP(環太平洋連携協定)についての議論が盛んである。農作物を含めたすべての品の関税を撤廃するという、貿易自由化の方策である。その中で、TPP参加の賛成の立場は、日本の農業について「もっと効率化していくべき」と主張、反対側では「参加したら日本の農業が更にダメになる」と危惧する。

その議論の中で両者がしばしば取り上げるのは、これもまた数年来よく耳にするようになった「国内自給率40%」という言葉である。先方が「農業を効率化して国内自給率を上げる」と言えば、後方は「輸入作物が急増し、自給率がガタ落ちする」と言う。

これらを遠く聞いていて私は思う。はて、国内自給率とはそもそも何であったか。

私が気にしているのは、40%という数値が正しいのか、もしくはカロリーベースの計算が妥当であるかどうか、というところではない。それではなくて、この「国内自給率」がそんなに「私」の生活に係るものだったか、である。

そう考えてしまうのも、私は現在、自身が食べるだけの野菜は、借りている畑に育つ分で足りている。卵もニワトリが産んでくれた1個を食べることができればよいし、肉も時折、ニワトリをさばいた量程度で満足できる。

この時点で一応、肉と野菜の自給率は100%である。(ただし私はよく、人の家でご馳走になったりするので、それ以外の肉もよく食べてはいる。あと、魚は知り合いが食べさせてくれるのをいつも待っている(笑)。)

また、おコメや調味料はできる限り、顔見知りの生産者から直接購入している。だからスーパーマーケットで買うものは、小麦粉、めん類、たまに豆腐や納豆、他のコーナーはだいたい素通り。

もし、「顔見知り」内自給率というものがあれば、私の場合は90%くらいだろうと見込んでいる。(飼料や原料を辿ったら、という指摘もあるだろうが。)

国内自給率の数値を聞かされても、私にはボンヤリとしか耳に届かないのである。

中島紀一氏(山崎農業研究所会員)が「食料自給論」について次の3つに区別している。「国家安全保障としての食料自給論」、「国単位での食料自給論」、「市民の暮らしレベルでの食料自給論」(※1)。永田町や国際会議において、「自給」と

いう言葉が発せられるとき、それは大体が前の2つの自給論においてである。ただ、私が生活し、そして身近な人と関わっているときのレベルはそこではない。

また宇根豊氏(同会員)は、稲作を大規模化しようとする国によって農地が集約され、結果、食べものを作る人間がより少なくなる状況について、国民が「国家の食料自給率が一人一人の家の食卓の自給率の積み上げであるところか、それを犠牲にして確保されていることに気づかないのは、どうしてだろうか」(※2)と苦言を呈する。

国や世論(大都市圏に偏る)が「自給率40%」を、とやかく叫ぶのは構わない。ただ、西の果ての佐世保在住の私が、「やったあ、自給率41%に増えたい！」とバンザイしても、空しい。

.....

ここで話を変えて、ようやく本題に移る。さて、TPPや国内自給率のことに加えて、鳥インフルエンザやBSE(いわゆる狂牛病)、記憶に新しい食品偽装問題、そして農業や化学肥料に関するあれこれ。そういった食に関する多くの事柄が、否定的な問題として私たちを困惑させている根本の要因は、実は同じところにあるのではないか。

その要因とはすなわち、現代日本において生産者と消費者の区別が、あまりにもはっきりしすぎている、ということである。言い方を代えれば、100%消費者という立場の人に全体が偏っている、ということである。

田舎を歩いていると、私からみて大先輩の、80代前後のおばあさんが小さい畑を、とても要領よく耕している姿をよく見る。話を伺えば、彼女たちは「若か頃から野良仕事ばしとった」ということから、格好がよいのも当然といえる。

その「若か頃」の時代、多くの人は少なからず生産者であった。都市か田舎、または家柄によって差があるとはいえ、ネギ一本植えず、野草も摘まず、魚一匹も自分でとらない、そういった100%消費者は、割合少なかったのではないか。

そして、そのころの多くの人が、前段で述べたような食に関する否定的な問題が発生したとしても、柔軟に対応できていたのではないかと思うのである。

なぜなら彼女ら彼らは、次のような考え方を持っているからである。

食べものに感謝できる。
食べものを非難できない。

というのも、0.1%でも生産者という立場に立つ人は、自分が食べるものは、自分にも責任があるという自覚を持っているからだ。

ひとつ思い出すのは、中国のギョウザ事件である。

あのニュースが流れたとき、それに怒る人々の姿に私は違和感を覚えた。彼らは本来なら、「まあそんなものだろね」とうなずくか、せめて、がっかりと肩を落とす程度にすべきであった。

自分の食べものを完全に人任せにしてしまった、という自覚がないからこそ食べものや、それを作っただけの人を、ただただ非難することになってしまうのだと思う。

食べものをとること(採ること・獲ること)を完全に人任せにして、感謝の気持ちは芽生えない。

また、消費者が0.1パーセントでも生産者としての立場に足を踏み入れることにより、そしてその眼で生産者を見守り、応援することできる環境を互いに築いていければ、農業、畜産、食品製造などいづれの産業でも、スクープになるような、種々の問題は起こりえないか、もしくは軽症で収まるように思えるのである。

.....

以上のことからしても、「食育祭 in させば」のような場は、大変に貴重である、という方向に最後は話を持っていこう。

食育祭では、生産者の顔が直接見える。生産過程を知ることができる。よって、顔見知り内自給率なるものが上昇する。

そして、子ども達が学校などでの食育活動を通して、自給率0.1%かそれ以上になり得た、その成果を見ることができる。大人も追従しなければならぬ。

さあ、日の当たるところにパセリを植えよう。春になったら山菜を摘もう。初夏には一粒の大豆に土を被せよう。

市民皆自給率0.1%をめざせば、結果として国内自給率40%をめざす以上に、素敵な未来がやってくると、私は信じる。

2011/1/23 たべつむぎ

(※1)中島紀一著『自然と結びあう農業を社会の基礎に取り戻したい―自給論の時代的原点について考える』より
(※2)宇根豊著『「自給」は原理主義でありたい』

(共に、「自給再考―グローバリゼーションの次は何か―」山崎農業研究所編／2008／農文協 に収録)

ご意見・ご感想をお待ちしております。

E-mail letter@tabetsumugi.net
Tel&Fax [0956]56-3756
homepage http://tabetsumugi.net